平成 19 年 8 月 23 日

各　　位


| | |
|---|---|
| 会社名 | タカラバイオ株式会社<br>（コード番号 4974　東証マザーズ） |
| 本社所在地 | 滋賀県大津市瀬田三丁目４番１号 |
| 代表者 | 代表取締役社長　　加 藤　郁之進 |
| 問合せ先 | 専務取締役　　木 村　　睦 |
| ＴＥＬ | （０７７）５４３-７２１２ |
| ＵＲＬ | http://www.takara-bio.co.jp/ |
| 親会社等の名称 | 宝ホールディングス株式会社 |
| 代表者 | 代表取締役社長　　大 宮　　久<br>（コード番号 2531 東証、大証第１部） |


# タカラバイオがライセンス供与した骨粗鬆症の検査技術を用いた診断薬の、三光純薬による発売開始について

タカラバイオ株式会社（社長：加藤郁之進）が独占実施権を保有する骨粗鬆症の検査技術を用いた体外診断薬「ピコルミ®ucOC」を、エーザイ株式会社（社長：内藤晴夫、以下「エーザイ」）及びエーザイの連結子会社である三光純薬株式会社（社長：神保正男、以下「三光純薬」）が、8月29日付で発売します。当社は、エーザイ及び三光純薬に、生体試料中の低カルボキシル化オステオカルシン濃度を測定することにより骨粗鬆症を検査する方法に関する特許の、体外診断薬分野における日本での独占的実施権を 2001 年に供与していました。

オステオカルシンは、骨芽細胞により産生される分子量約 6,000 のビタミン K 依存性のカルシウム結合タンパク質で、骨形成に必須です。オステオカルシン分子内のグルタミン酸残基がγ-カルボキシグルタミン酸残基に変換されたものは、活性型オステオカルシンと呼ばれ、活性型のみがカルシウムを骨に蓄積できることが知られています。一方、オステオカルシン分子内のグルタミン酸残基のままのものは、カルシウムを骨に蓄積できる能力が弱く、低カルボキシル化オステオカルシンと呼ばれています。

当社がエーザイ及び三光純薬にライセンス供与した特許は、生体試料中の低カルボキシル化オステオカルシンの濃度を、当社が開発した抗体を用いて測定し、骨ぜい弱性と骨粗鬆症骨折の危険性を検査する方法に関するものです。当該検査方法は、当社がフランス国立衛生医学研究所（INSERM）の Pierre D. Delmas 博士と共同で開発しました。また当該特許は日本、米国、欧州の主要諸国で既に登録されています。

当社とエーザイ及び三光純薬との間で 2001 年に締結された実施許諾契約書では、本契約締結に伴う契約一時金、臨床開発進展によるマイルストン料、当該体外診断薬の売上に応じた実施料などの支払いを、当社が両社より受けることとなっております。

---


当資料取り扱い上の注意点

当資料中の当社の現在の計画、見通し、戦略、確信などのうち、歴史的事実でないものは、将来の業績に関する見通しであり、これらは現時点において入手可能な情報から得られた当社経営陣の判断に基づくものですが、重大なリスクや不確実性を含んでいる情報から得られた多くの仮定および考えに基づきなされたものであります。実際の業績は、さまざまな要素によりこれら予測とは大きく異なる結果となり得ることをご承知おきください。実際の業績に影響を与える要素には、経済情勢、特に消費動向、為替レートの変動、法律・行政制度の変化、競合会社の価格・製品戦略による圧力、当社の既存製品および新製品の販売力の低下、生産中断、当社の知的所有権に対する侵害、急速な技術革新、重大な訴訟における不利な判決等がありますが、業績に影響を与える要素はこれらに限定されるものではありません。

＜参考資料＞

【エーザイ株式会社の概要】
会　社　名：　エーザイ株式会社
代　表　者：　代表執行役社長　内藤晴夫、代表執行役副社長　松野聰一、
　　代表執行役専務　松居秀明、代表執行役専務　椎名誠
設 立 年 月：　1941 年 12 月
住　　所：　東京都文京区小石川4－6－10
事 業 概 要：　医薬品、医薬部外品、製薬用機械等の製造販売
ホームページ：　http://www.eisai.co.jp/

【三光純薬株式会社の概要】
会　社　名：　三光純薬株式会社
代　表　者：　代表取締役社長　神保正男
設 立 年 月：　1954 年 5 月
住　　所：　東京都千代田区岩本町1－10－6　TMM ビル6階
事 業 概 要：　臨床検査薬、臨床検査用機器、研究用試薬、理化学機器の製造・
　　輸入・販売
ホームページ：　http://www.sanko-junyaku.co.jp/

**【語句説明】**

**骨粗鬆症**
加齢や閉経後のエストロゲン不足が原因となり、骨密度（一定骨内のカルシウムとリンの量）が減少し、骨にすが入った状態を骨粗鬆症といいます。骨粗鬆症は自覚症状のないまま進行し、やがて大腿骨頚部や脊椎などの骨折が起きやすくなります。

**オステオカルシン**
骨芽細胞によってつくられる49アミノ酸からなるタンパク質で、カルシウムを骨に蓄積することで骨形成に働きます。

**骨芽細胞**
骨の中では新しい骨形成と古くなった骨分解の新陳代謝がバランスを保ちながら絶えず行われています。骨形成を担当するのが骨芽細胞であり、骨分解を担当するのが破骨細胞です。骨芽細胞は骨の構成タンパク質であるⅠ型コラーゲンやオステオカルシンを合成し、血中からカルシウムとリンを取り込んで石灰化をおこすことにより骨を形成します。

**活性型オステオカルシン**
オステオカルシンの分子内に3ヶ所存在するグルタミン酸残基が、ビタミンK依存性カルボシキラーゼという酵素の働きにより γ-カルボキシグルタミン酸残基に変換されたものを活性型オステオカルシンといいます。活性型オステオカルシンのみがカルシウムと結合して骨形成に働くことができます。